ます。やまと公園は、大和駅の真ん前で、アクセスと立地がすごくいいですね。多分、大和市のある種へそになる中央公園でしょうね。人生100年時代と「やまとニュース」に出ていましたが、公園もまさにそういう時代です。時間が経って傷んでくれば、リニューアルが必要になります。やまと公園は立地はいいのですが、ちょっと暗かったので、それがガラッと変わるでしょう、いいと思います。それからシリウスみたいにいい施設が近くにありますから、公園だけでなく市民利用の場所をつなげることです。まちというのは施設ごと担当ごとバラバラに考えてはだめなんです。商店街も公園も、シリウスも駅もネットワークされ、歩けるまちがとてもいいまちなんです。

一方で、大和市には何号公園という小公園がたくさんあります。小公園は近所の人たちがボランティアで、自分の庭の延長みたいに考えて花や野菜を作ったり、自主管理方式で自由化するといいと思います。そして、小公園のリニューアル予算がとれたら、近所の大人も子どももワイワイガヤガヤ絵を描いたり、模型をつくったり、ワークショップというんですが、地域の小さなコンベンション機能を発揮すればいい。今はコロナでちょっと注意しないといけませんが、都市社会は人が集まることが、とても大事なんです。昔の縁日、朝市のような機能を公園が果たすべきです。「○○することは禁止」は昔のことです。多くの人が集い、まちがにぎわい、花や野菜を育てる、木に登るなど、多機能なのが公園なんです。

大木 いろいろな人が集って、いつの間にか仲間になって輪ができて、というつながりですね。このつながりや居場所が非常に大切だということを、コロナ禍で改めて感じているところですが、進士先生は「緑のまちづくり」「土や農とのふれあい」、そこでの人との出会いと交流を重視していらっしゃいますね。

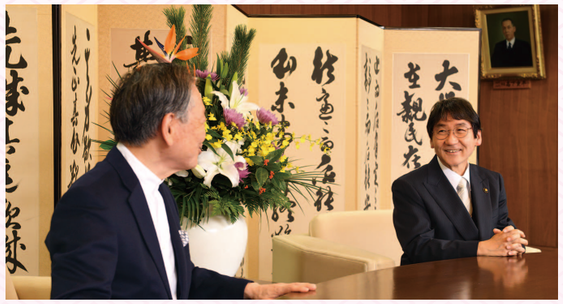
進士 英語で緑を「グリーン」というでしょう。「グリーン」の語源は、「ガーラ」というアーリア語です。生長するという意味で、一言で言うと生命です。生命あるものが緑です。だから、どこの国でも生命あるものに憧れる。およそ人間は生き物で、農林水産がなくては生きられない。都市だけでは元来やっていけない。だから市街地にも「農」や「緑」が不可欠なんです。

大木 農業をするにも、緑を育むにも多くの人の協力が欠かせません。いろいろな世代で交流をしながら生きていくということは、ますます大事になってくるのではないかと改めて思います。農業について造詣が深くていらっしゃる進士先生ですが、大和市では「援農サポーター」の取り組みを行い、非常に喜ばれています。農業のことを知らないかたが、農業をやってみようとするときに、そのきっかけとして「援農サポーター」という制度は非常に有効だと考えています。援農サポーターという門を叩いていただければ、扉は開かれると思います。そして、そこから市民農園を使ってみたいというように広がっていってほしいですね。

進士 市長のおっしゃるとおりだと思います。農業は、本当は誰でもやれるはずだったんですよ。農家のことを百姓というでしょう。マスコミは差別語だと決めつけていますが。現代社会は分業化社会ですが、昔の農民、百姓は何でもやり万能でした。向こう三軒両隣どころか、コラボ営農のための「結」という仕組みがありました。農作業はみんなで一緒にやらないとできなかったんです。また農家は、農作物をいつ出荷したらもうかるか判断できる経営者でビジネスマンでもあったのです。「村の鍛冶屋」という童謡があるでしょう、村には鍛冶屋がないと困るんです。なぜか。疲れずに効率的に農作業を進めるには作物や土の硬さや農民一人一人の腕や手の長さに応じて、道具を変えないといけない。鎌や鍬の刃の角度、柄の長さがみんな違うからです。人間の動作を人間工学的に合理的にするために、田んぼや自分に合う寸法に鍛冶屋に叩かせました。大量生産、大量流通の発想ではだめなんです。

一例を挙げましたが、農民は、天気と季節を読み、いつ田植えをし、いつ稲を刈るのが最適か、すべてを考えなければなりません。百姓の百はたくさん。姓は職業、すなわち能力。たくさんの能力を発揮できる人間ということです。「トータルマン」です。私は自分自身も百姓を目指してやってきました。三、四姓の専門ばかにならないように。学者は、学問しか知らないではだめで人間を知ることだと。百姓は、何でも知っていて何でも体験しました。元来人間は何でもやれるように生まれたのに、学校教育が区別し、専門分野を決め、資格制度で縛り、これでしか給料をもらえないような制度にどんどん突き進めてしまいました。だから、本来人間の中にあるトータルなものがほとんど出せなくなってしまいました。サラリーマンでも農体験するのは、人間本来の姿、当たり前なんです。マンションのベランダでもいい、生命と触れ合うことです。親御さんは、子どもたちの情緒性を大切に育ててほしい。情緒性は、土や緑と付き合わないと育まれません。コンクリート社会はストレスなんです。大和市にも市民農園が十分用意されていますし援農サポーターも大いに結構です。農家のマンパワーを活かす機会をもっと増やすべきです。市民も農家もウィンウィンです。

群衆の中の孤独――つながりと居場所

大木 これからおひとりさまが非常に増えてきます。一人になること自体は仕方がないと思いますが、孤独感を持たずに済むような、一人になってもひとりぼっちにさせないまちを目指していきたいと思います。そこで大切なことは、居場所ではないかと思います。大和市では、気軽に立ち寄り長居もできる、居心地のいい居場所として、シリウス、中央林間図書館などの図書館を作ったほか、やまと公園をはじめとする公園のリニューアルなどを実施してきました。さまざまな居場所があることが、その人が家から外に出るための、後ろからぽんと背中を押す何かになればと思います。

ちなみに大和市では65歳以上のかたを含む世帯のうち、40パーセント以上が現在、おひとりさまです。これは20年の日本の姿なんですね。人生、生まれてくるときも一人、そして亡くなるときも一人。一人ということを避けて通ることはできませんが、ひとりぼっちにさせないという姿勢だけは大和市として貫いていきたい、目指していきたいと思います。その点において、おひとりさま支援条例の制定や、居場所としての図書館などに力を注いできました。ぜひ、市民の皆さんからも、さまざまな提案をしていただけると大変ありがたいと思います。また、大和市では「こもりびと支援条例」も制定しています。ひきこもりのかたを「こもりびと」という名称にあえてさせていただきました。専門の相談窓口を開設し、これまでに約260人から延べ1,500件を超える相談がありました。ご家族だけでなく、ご本人も相談にいらしていますし、こもりびとどうしで話し合いを持つということまで生まれています。長い人生のどこかで「こもりびと」のような経験をしているかたは意外に多いのではないかと思います。そういうかたがたに大和市としてエールを送りたいと思い、「こもりびと」という名称を考え、条例も作りました。条例を作るということは、一過性では終わらないということです。こもりびとの皆さんに対する支援は、大和市が存続する限り、この条例がある限り、続けることができるわ